

---

# 完全無欠の勇者様が居候!?

奈留木兆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

完全無欠の勇者様が居候！？

### 【Nコード】

N2429Q

### 【作者名】

奈留木兆

### 【あらすじ】

『俺って見た目からして勇者っぽいだろ？』『わたしね！せかいせいふくをすることがゆめなんだ！』『完全無欠の最強勇者と幼女の新米魔王の同棲(?)ストーリー。時々、村長や魔王の父などが登場するかも。』

## 序章 魔王と勇者の出逢う直前

ここはあるお城の中。

「さびしいなー」

玉座に座り、足をぶらぶらをさせている。

「だれかこないかなー。ゆうしゃとかー」

ずるずるとずり落ちていく彼女はここのお城の主である魔王。

魔王人に災いを与えたり、悪の道に陥れたりする魔物。その言葉

は、彼女の父親である元・魔王のためにあるような言葉である。

元・魔王は悪逆非道を尽くし、挑んできた勇者には桁違いの力で追い返していく。だが、彼はもう50世紀も生きてたということ隠居をした。そこで、彼は愛娘に魔王の座を託した。

そして、彼女が魔王の座についてから早3日。

「ぱぱうえは、リゾートちということにいつているから、ひまだー」

彼女は大人の小人と同じくらいの身長、頭脳は産まれたてのエルフの子供と同じくらい。つまり、見た目と頭脳を人間的に言う人間の6歳ぐらいということだ。

「そうだ！ドラゴンにのつてにんげんのむらをおそおうかな！」

思い立ったらすぐに行動の彼女は、飼育小屋に向かった。

「ぼちー。たまー。今からにんげんのむらをおそうよ！！だから、おきてー」

ドシ、ドシと地響きをさせ歩み寄ってくるドラゴン2匹。

ぼちとたまは彼女の魔王になった記念にと元・魔王から贈られた愛玩動物の一部である。2匹の鼻が彼女に寄せられ、彼女はうれしそうに鼻をなでた。

なで終わると、白色のドラゴンの背中に乗った。

「勇者殿！本日はどちらに？」

「南の森の奥にある魔王の城に、ちょっとな」

「なんと！それは素晴らしい！！あの悪逆非道で無敗な魔王に挑むとは！」

村の者にも伝えてきますな！と言い、村長は出て行った。そのとき、正直行くのがだるいと思った勇者。

「なんだよ、無敗の魔王って・・・まあ、俺も負けしらずだけどな」  
その男の親はいたって普通の人である。

その男は生まれも育ちもいたって普通である。

ただ違うのはその男が勇者の素質がずば抜けていたぐらいだ。

小さい頃から木の棒でモンスター退治を行い、森に探検に行くと必ず宝箱を拾ってくる。

そんなことをしていたせいか、周りから勇者になると思われ育った。自分も勇者になるんだと感じながら育ったので、自分が勇者になったことに疑問は感じていない。

そういえば、宝箱を初めて村に持って帰ったとき、大人たちは俺を担ぎ祭っていたな。と思い出に浸っていると、突然外から叫び声が聞こえた。

「勇者殿！！外にドラゴンが！！」

「まかせとつけて。いっちょ、ドラゴンを倒しますか！」

「ちなみに、ドラゴンの背に魔王と名乗る小娘が」

「はあ？魔王ってすっげえ風格のある男って聞いたけど？」

「ですが、『わたしはまおう！ひまつぶしにこのむらをおそいます！』と」

なんだよ、暇つぶしって・・・と思いながら、村長に村人を避難させるように言った。

「バツチリですぞ！村のみんなはすでに避難小屋に移動しましたぞ」  
この村長に若干いらつきながら勇者はドラゴンに向かった。

今思えば、このときから俺の運命はあの魔王に振りまわされる運命だったんだ。

## 第一話 地獄耳勇者の新技

「ぼち！いえと、ひとをもつとふみちらかせ」

ガオーと白色のドラゴンは答えるかのように鳴いた。

白色のドラゴンは大きい足を振り下ろし、青い炎を吐き出す。青い炎で焼かれた家は灰になるまで焼かれていった。もちろん、村長によって村人たちは非難していたのでこのドラゴンたちの被害にはあっていない。

「おかしいな？ひとがいない・・・」

魔王は首を傾げながら村をドラゴンの上から眺めていた。

黒いドラゴンがしっぽでひとつ、ふたつと家を消していった。

「その自称魔王！！」

「！？・・・むらびと！ぼち、たま！あそこにいるむらびとAをさっさとこころして！」

魔王の乗る白色のドラゴンの前に立ちはだかったのは村人Aではなく、勇者だった。

勇者は細身の剣を構え、ドラゴンの上にいる魔王を睨んだ。

「村人じゃねえよ！勇者だ、勇者！！」

「むー。こえがきこえない・・・」

魔王の耳には勇者の声が聞こえていない。

勇者の耳には魔王の声が聞こえている。

なぜ二人の間にこのような差があるのか。それは、魔王の耳が都合よくできており、勇者の声を意識的に聞いていないのか。もしくは、勇者が地獄耳なのか。きっと、後者なんだろうと思われるが。

「よいしょつと」

魔王は掛け声とともにとんとんと軽やかにドラゴンから降りた。

「さつきあなたはなにといっていたのですか？」

「はあ？え、いや・・・村人じゃねえよ。勇者だ、勇者つと」

ちよつと勇者はさっきの台詞をもう一度言うのが恥ずかしいのか、

魔王から視線を逸らしながら言った。

「そんな！ゆうしゃというのは、もつとふといけんをもって、たたかうときはじめんとうみがせつだんされていくつてきいたのに！！」  
「はあ！？どんな勇者だよ？そんなやつがいたら世界が破壊されまくっているじゃないか！」

「だって、パパうえの『5世紀にわたる魔王による世界征服日記』にかいてたんだもん」

ちなみに彼女の魔王知識はパパ上こと、元・魔王によって叩き込まれていた。元・魔王によると、『魔王になるための英才教育を可笑し楽しく教えた』らしい。

「お前、魔王なのか？」

「れっきとしたまおうだもん！わたしはさんだいめまおう！！」

「3代目！？おまえの前のやつが俺が倒すべき魔王か！」

「まえ？パパうえをたおすの？パパうえはせかいでいちばんつよいんだから！むらびとAごときがたおすことできないよ！！」

「ちっげえよ！俺は村人Aじゃなくて勇者だ！」

いまだに勘違いをしている魔王に勇者は思わず持つている剣を地面にたたきつけた。

すると、地面はそこから割れていった。

「えっ・・・そんなバカな！！」

「じめんがわれた・・・！！」

地面が割れていき、ドラゴン2匹は雄叫びを上げながら飛んでいった。

「ほんとうにあなたはゆうしゃだったんだ！！」

「なんで割れたんだ！？」

「パパうえの日記にはゆうしゃはわたしのねがいをかなえることができるって！！」

笑顔で勇者を見上げる魔王。勇者はまだ困惑をしている。自分の剣によって地面が割れたことに。

そして2人の会話は噛み合っていないのだ。

「わたしね！せかいせいふくをすることがゆめなんだ！！」

魔王は可愛らしい笑顔でえいっと手をたたくと、黒い霧が発生し2人を包んだ。

「このままおしろまでいつきにびゅーん！」

勇者は魔王に拉致をされてしまった。

勇者が村からお城に強制的移動をさせられたとき、最後に聞いたのは村長の声だった。

「勇者殿が魔王をどこかにお連れになられた！きつと留めをさしに移動をされたにちがいないぞ！みなのも、よろこべー！！」

いや俺が魔王に留めをさされるに違いないと思った勇者だった。

それに俺は勇者だけでも、魔法を使えるわけがないだろと言おうとするころには可愛い部屋についていたのだ。

ついた途端に彼女は倒れた。

## 第二話くママな勇者は疲れきり？

勇者の目の前で倒れた魔王。

勇者が連れてこられた部屋は、ピンクを基調とした壁紙や置物。又イグルミやらが転がっている子どもの片付けられていない部屋だった。

「え！？これってチャンス！？3代目魔王を倒すチャンス到来か！でもなー小さい子を殺すのはなー」

スヤスヤと寝息をたてながら寝ている魔王を見て思わず布を探して風邪をひかないように掛けようと思ってしまった。

「いやいや！相手は魔王だ！！勇者は魔王を倒し人々に平穏を与えるためにいるんだから、魔王が風邪をひかないか心配するなよ、自分！！」

自分を叱咤する勇者の声がかかったらしく、魔王から可愛らしいというなり声が聞こえた。

「ふはー。やっぱりレポートはつかれる…あ！ゆうしゃ…かくこつ！！」

勢いよく立ち上がり、いざ挑まん！！とばかりにダッシュをしてみせる魔王。

その時、ずべしという音とともに勇者の視界から魔王が消えた。

「いったああああ！！って…！？わたしの、ヴェルディ・アミーゴ・プリゼンティング・カバオ・ジョセフィーヌ120せいが！！」

彼女の足元には右手がちぎれた顔が縫われていない犬の又イグルミがあった。この又イグルミにはただならぬ秘密が隠されている。

「ながつ！！名前ながつ！！しかも120世とかどれだけ世代交代してるんだよ！？」

「ぐす。ごめんね、ヴェルディ・アミーゴ・プリゼンティング・カバオ120せい…まちがえた、ヴェルディ・アミーゴ・プリゼンティング・カバオ・ジョセフィーヌ120せい…いえないよ」

「だったら短くしたらいいだろ!？」

少し間を開けて両手をぼんと叩いた。

「おお! ゆうしやはあたまいんだ! パパうえにほうこくしなれば!」

「いやいや、普通はすぐに思い付くだろ!! 馬鹿なのか!? 魔王は本当は馬鹿なのか!？」

どこからかノートとペンをとりだし書き始めた。

「ゆうしやはあたまがよくて…まおうはばかっど…あれ? わたしはかなの!？」

マイペースな魔王に振り回され続けたのでお疲れぎみな勇者は、なげやりな気持ちになっていた。

「そうじゃないのか? 俺もう帰っていいか?」

「それはだめ! めっなの! ゆうしやはまおうのねがいをかなえるまでかえつたらだめ!」

地団駄を踏み勇者を困らせる魔王。その凶は、親におもちゃを買ってもらえない子どもの様子のようだった。

「なんだよ、その願いつて」

その駄々っ子をあやすのは勇者というより母親のほうがつくりくる。

「えつとね、せかいせいふく!」

勇者は思わずこけてしまうところだったが、踏みとどまった。

「叶えれないから! 勇者は世界征服をするやつらを阻止する役目なんだからな!？」

「ちがうよ! ゆしやをそばにおいてたらねがいがかなうんだよ!」

魔王の素晴らしい勘違いはどこから仕入れいるのかが勇者は心当たりがあった。

「また魔王の日記か!？」

「うん! パパうえのにつき!」

「読ませる」

実は本の中身が気になってしょうがない勇者だった。

「よんだらかんそうをさくぶんようし15まいいじょうで、げんごはごだいインバルティンごでかかないとだめだよ。かかなかつたらパパうえにのろいころされるよ!」

「嘘だろ!?!」

あの変なことを書いてある日記を書いたという魔王による呪いというのは本当なのか、嘘なのか判断できない。これは嘘つきサーカスのピエロと話した時以上に難しいのかも知れない。

「うそじゃないもん!!!」

「そういうことにしておくよ。で、帰っていいか?」

自分からふつといてなんだが、勇者はとてつもなく面倒くさくなっていた。

「だめ!せかいせいふくができるまでここにすむの!!!」

「はあ!?!俺を殺すんじゃないのか!?!」

勇者の疑問の意味がわからない魔王は大きな目パチパチさせていた。ついでに言うと、魔王の目の色は黒だ。

「なんで?なんで、ころさないといけないの?」

「魔王と勇者は敵対関係だろ!?!ふつうは?」

「ゆうしやはこまったひとをてだすけをするんでしょ?」

「人限定でな」

勇者と言えども、人以外の者まで助ける義理はないと思っている。だからねがいをかなえてもらうんだ!」

完全に人の事を聞いていない魔王に、勇者は脱力していた。

まだまだこれからが勇者にとっての大きな試練が待っていた。

### 第三話 勇者の口癖『人だけにな!』

チュンチュン。と、朝日の知らせをしてくれる小鳥たちのさえずりが聞こえた。

「あーよく寝た・・・!？」

「おはようございます」

天井に引っ付いている目や鼻などが無い人が勇者を見下ろしている。

しかもその人には耳と尻尾がある。

俺は見下ろされるのが一番嫌いなんだと少しばかり心の中でつぶやいてみる。すると引っ付いている生き物が恐る恐る無い口を開いた。

「わたくしの名前は申すほどでは無いのですが・・・ヴェルディ・アミーゴ・プリゼンティング・カバオ・ジョセフィーヌ120世と申します」

「申すんかい!!」

「ただの人間にわたくしの名前を間違えられるというのは片腹痛いので」

口が無いのにも関わらず、くもった声のしない生き物。勇者はまぐらを投げつけてみた。

華麗によけるではなく、顔面に上手に受け止めて見せてくれたのだ。

「ブフェ!!なにををするのですか!?!この人間ごときが!!わたくしの偉大さが分からないのですか!?!それに、魔王様が全ての指を犠牲にしてまでつけてくださった腕が取れたじゃないですか!」

腕の取れた姿に勇者は見覚えがあった。

「まさかお前はあの時の人形か!？」

「お前じゃありません!わたくしの崇高すべき名前はヴェルディ・アミーゴ・プリゼンティング・カバオ・ジョセフィーヌ120世で

す」

片腕をもち詰め寄ってくる人形だったもの。勇者は顔のパーツが無いのに何故かやつ表情が分かることにイライラしていた。きつとヴェルディ・アミーゴ・プリゼンティング・カバオ・ジヨセフィ

ー又120世の表情は、勇者を鼻で笑っているのだ。  
「ヴェルディ・アミーゴ・プリゼンティング・カバオ・ジヨセフィー又120せい！ゆうしやはまだおきないの？」

ノックもなしに、問答無用と扉を押して開けてきたのはあの幼い魔王だった。

さらに勇者は寝るとき上は着て眠らない。それが勇者のポリシーとなっていた。だから、魔王はノックもせずに入ったために、勇者の上半身裸を見ることになってしまった。

「へ、へんたい！！わたしにはだかを見せるなんて、わたしをおよめにいかせないきですか！！」

「勝手に入って、勝手に俺の裸を見たのはそつちだろうが！！」  
上半身裸のまま抗議をする勇者に魔王は赤らめた顔でなにか怪しい呪文を唱え始めた。

「魔王様！その呪文はあの一国を沈めたという禁断の術！」

「ちょ！それだったら、ここも危ないんじゃない？！」

「危ないですよ！あなた勇者なんですよ！？だったら、どうにかしてください！！！」

魔王の周りには赤色や紫色の風が渦巻いていた。

ヴェルディ・アミーゴ・プリゼンティング・カバオ・ジヨセフィー又120世は先ほどまで人をばかにしていたのにもかかわらず、勇者にすがりついていた。

「ヴェルディなんちゃら、ひつつくな。そして、目がないくせに涙が出てるのがなんでだ！？」

さすがの完全無欠な勇者でさえこの顔なしの名前は覚えられないらしい。顔なしの目のあたりなのかそこからちよろちよろ何が垂れている。

「毛穴から分泌されているのです！さつさと魔王様のあの恐ろしい禁断の術を止めてください！」

そこまで顔なしに懇願されるとやらないといけないな、と感じた勇者。やらないと自分の命まで無くす勢いぽいのでとりあえず、布団を投げつけてみた。

ばさあと魔王に見事にかかり、風が布団の中で渦巻いている。だが、それは布団の中だけなので、布団の外では元の静けさを保ち始めた。

「一応礼を言いますが、次はわたくしの力でどうかします！」

「・・・次起きないようにしろよ」

顔なしに指でさされながら脱力をした勇者は、布団のそばまで近づいた。

布団はなにか怪しい動きをしていた。それは、子供が白い布をかぶり『おばけだぞー』と驚かしている姿とかぶる。だが、そこまで可愛らしいものではない、お化けの手足みたいなのが連打レベルで突き出してくるのだ。

勇者はすぐにとりやつと布団をはぐと、魔王が目には涙をためながら現れた。

「うえーん！ゆうしゃのバカ！わたしはくらいのためなの！こわかつたんだからうちくびー！」

「ふざけんな！そんなんで打ち首にされてたまるか！」

「魔王様に意見をすると何様ですか！！」

ずかずかと近寄ってくる顔なしにひきながら勇者は、上着を探し始めた。

また魔王が変な呪文を唱えられたら堪ったもんじゃないからだ。

「あ！ヴェルディ・アミーゴ・プリゼンティング・オバカ・ジヨセフィーヌ120しえいのうでがとれてる！わたしがまたなおすね！ん？・・・ゆうしゃがいるんだから、ゆうしゃにやってもらおう！」

これはいい考えだと魔王はわたくしの名前を囁んでいる魔王様、

万歳！と悦に入っている顔なしを見上げ、同意を求めていた。勇者はそれを聞き、上着を片手にすくいやな顔をしていた。別に裁縫ができないわけではない。村娘である幼馴染よりかははるかに綺麗に仕上げることができていたから。ただ勇者はこの顔なしには起きながら殺意しか芽生えていない。

「いやです！わたくしはただの人間に触られるなんて！！」

「俺だつて得体の知れないやつを救つたつて何にもならねえよ！」

「そんな・・・ゆうしゃはりえきをかんがえないで、ひとたすけをするつて・・・」

「ああ！人だけにな！」

勇者は昨日の会ったときから言っている台詞をまた魔王にはいた。

この台詞は勇者の口癖になってしまふ勢いだ。

## 第四話〜ママ(?)と勇者のちよめちよめ

勇者が寝ていた部屋から魔王の玉座に移動していると何かが聞こえてきた。

「ん？なんか聞こえないか？」

「ああ。微かにですが、耳に不愉快な声が聞こえますね」

勇者はヴェルディ・アミーゴ・プリゼンティング・カバオ・ジョセフィーヌ120世と初めて共感することができた。

「ねえねえ、ヴェルディ・アミーゴ・プリゼンティング・カバオ・ジ

ョセフィーヌ120せい！ママがきたよ！」

「ママ？」

「魔王様。あれはママと呼んではいけません。ゴミと呼んでくださいと何回も申しましたよ」

「だって、ママがいったもん」

「ママってなんだ？」

勇者のつぶやいた疑問は魔王に顔なしに届いていなかった。

「魔王様。わたくしはゴミの掃除をします」

「そうじ？わたしのへやはいったらだめだよ！！」

年頃な娘な発言をする魔王にシヨックを隠せない顔なしはその場に崩れ落ちた。

魔王はその顔なしに念押しかのようにだめだよ！と言い勇者の手を引き玉座に向かった。

勇者は顔なしが気になり後ろを振り向くと、そこはありえないくらいの水が溢れていた。見ることを後悔してしまうほどの衝撃を勇者に与えていた。

なぜなら、水は水でもなぜか黄色の濁ったものだった。

「え、ちよつと。気持ち悪いんですけど！」

「あのね、ママはいつもぎょくぎょくにきてね、いろんなことおしえてくれるの」

「それってママなのか？」

勇者の知っている『ママ』というのは、裁縫やら何やらを家で行い、夫の助けをしていたり、特にすることといえば、子育てだろう。勇者は魔王の間違った知識を正してやらないと俺が疲れてしまうと確信をしていた。

魔王は久しぶりにママに会えるので、鼻歌を歌いながら玉座に向かった。

勇者は何も答えてくれない魔王を睨みながら後をついていった。

「あらー、お久しぶりね。魔王ちゃん」

「そうだね！ママ！！」

玉座のある部屋につくとてっかてかに光る唇を惜しげもなしに突き出している見た目男がいた。

そう見た目が男がいた。

「そのいい男はだれかしら？」

声変わりを終えた男が無理やり甲高い声を出そうとしている不愉快極まる音の発生源は見た目男からだった。

「ゆうしゃっていつて、ひとだすけをしてくれるいいひとなんだよ！」

「んまあ、そんないい人がいたのね。私も助けてもらいたいわね」  
うっかりしたらこの見た目男の台詞の語尾にはハートマークがつくのではないのかと思うほどのピンク色をみせていた。

「ああ。私のことはママか、ボスと呼んでね」

「またも見えないピンクのハートが飛んできた。」

「いや、ピンクというより紫色のハートが飛んでくる。」

「私のことを間違えてダンディなおじさまと呼んだら、あなたのおごを2つに割るわよ？」

「・・・イエッサー。ボス」

勇者は精一杯の抵抗のようにボスと呼んだ。

ママはその返事にうれしそうに鼻を鳴らした。

「ママはね！いろんなぬめずらしいものをみさせてくれるんだよ！」

魔王の出す珍しい物の中には、何か得体の知らない物の名前が含まれていた。

昔の偉い人が使用していたとかいう仮面などがちょいちょいでてきた。

「あ、勇者ちゃん。私は盗賊じゃないからね。だから、私を退治しようとしたらだめよ！」

人差し指でめつとしてくる、ママに鳥肌全開で答える勇者。

「まーた、あなたは勝手に入りましたね！！このゴミが！！！」

「んまあ、私のことはゴミではなくママって呼ぶように教えたはずよ？お仕置きね」

また頭痛の種が舞い込んできやがってと、勇者は空気を読んで心の中でつぶやいていた。

顔なしは人差し指をママの厚い胸元をさしていた。ママは顔をすぐに崩し、勇者には理解のし難い行動をした。

「お仕置きというより、本音はあなたみたいない体の男を抱きしめていたいのよね！」

もちろん、勇者ちゃんも抱きしめてあげるわよ！と、ばっちーんと右目をウィンクしてくるママ。そのとき、顔なしは全ての穴という穴から水分を分泌していた。

「ママは、きょうなにもってきてくれたの？」

汗か涙でべちよべちよな顔なしの体をママは離し、魔王の前に綺麗な小細工をされた箱を出し、開けてみせてくれた。

「んふふ。魔王ちゃんの気に入りそうな・・・呪いの人形、そして五寸釘のセットよ！」

「またあなたは魔王様に変なものを渡そうと！！！」

「ヴェルディ・アミーゴ・プレゼンティング・カバオ・ジヨセフィー又120しえい・・・したかんだ・・・あのね！わたしね！これほしかったんだ！」

笑顔でにこにこしている魔王に顔なしは、人間でいう鼻のあたりから赤い血らしきものを出していた。

どんびきをしている勇者。その勇者の真正面にたっているママはムフフと笑いながら、魔王の頭をやさしくなでていた。そのやさしくなでている手は男の手で、無骨な手をしていた。

「ママのてね、パパのてより、おとこーって感じがする!」

「魔王ちゃん、女性には漢って言ったら駄目なのよ?」

ママはなでる力をさらに強くし、魔王の頭をさらにくしゃくしゃとしていった。

魔王は嫌がる様子を見せなく、むしろうれしそうにしていた。

勇者はボスの性別が男なんだと確信を得ていた。

顔なしは水分を出しきったのかやつれているようにみえた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2429q/>

---

完全無欠の勇者様が居候!?

2011年2月23日13時25分発行